
バカとボンゴレの嵐の協奏曲(コンチェルト)

朝露

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとボンゴレの嵐の協奏曲^{コンチェルト}

【Nコード】

N1699S

【作者名】

朝露

【あらすじ】

文月学園Fクラスに転校生がやってきた。その名は獄寺隼人？9代目からの指令で転校してきた彼は、Fクラスに毒されてしまうのか？

始めに（前書き）

やっちゃいました。

他の連載中のも止まってるのに・・・。

でも、頑張ります。

始めに

- ・並盛トリオの年齢は17歳
- ・10代目を継承することは決まっている
- ・若干復活側のNL要素あり？（獄ハルなど）
- ・瓜やナッツたちはリングにならず、匣のまま（あまり、アニマルリングは好きではないので）
- ・転入するのは獄寺だけ（の予定）
- ・バカテスは2巻から3巻の間
- ・文月学園のある町は、黒曜の隣町
- ・骸は、ツナたちが中3の時にボンゴレに従うことを条件に牢獄から出ているため、たまに出てくるかも（少なからず感謝はしているらしい）
- ・獄寺は原作より少し大人しい

新たな始まり、来る！（前書き）

タイトルを略そうと「バカボン」にしかない・・・

新たな始まり、来る！

ツナ、獄寺、山本はリボーンに呼び出され、ツナの部屋にいた。

「なあ、小僧の用事ってなんだろうな？」

「さ、さあ・・・（すっごいイヤな予感が・・・）」

「10代目と俺だけならともかく、なんで野球馬鹿まで・・・チツ」
「ま、まあまあ、落ち着いてよ、ね？」

そこへ、

「お前ら、3人ともいるな」

「おい、リボーン！なんだよ、急に呼び出して？」

3人を呼び出したリボーンが入ってきた。なぜか手に皿を持ってる。

「うるせえ、ダメツナ。人の話はだまって聞け」

「なっ・・・？（一番人の話聞かないの誰だよ？）」

「・・・後で課題増やすからな。それよりお前ら1枚ずつこれを食べ」

そう言って出した皿の中には3枚のクッキーがあった。大きさなどは特に変わらない。

「ハア？そんな事のために呼び出したのか？」

「説明は後だ。サッサとしろ」

「じ、じゃあ10代目お先にどうぞ」

「え、う、うん」

ツナがクッキーを取ると、山本が

「俺はこれなのな」

と、1枚取った。

「なっ、デメエ・・・」

文句を言いかけたが、渋々といった顔で最後の1枚を取る。口に含むとしばらく何も起こらなかったが、突然獄寺が

「ハ、ハガア？」

腹をおさえて苦しみだした。

「ご、獄寺君っ？」

「おい、獄寺っ、大丈夫か？」

「大丈夫な・・・ワケあるかア？リ、リボーンさん・・・これは、まさか・・・？」

「ああ。ビアンキが作ったヤツだぞ」

「なんでそんな危険なもの？」

「ロシアンルーレットだ。獄寺には、文月学園に転入してもらう」

任務、来る！

「・・・ここか。10代目に御迷惑かけるワケにはいかねエ、サッサと終わらせてやる」

リボーンにいきなり言われてから数日後、獄寺は文月学園の門の前にいた。
それは数日前に遡る。さかのぼ

「・・・・・・・・え？」

文月学園へ行けと言われ、獄寺は固まった。

「お、おいリボーン！どういうことだよ！？」

「文月つてたしか黒曜の隣町だったか？」

「9代目からの任務だ。内容は・・・説明がめんどくせエからコレを読んどけ」

言いながら投げたのは少し厚い紙の束だった。他人に読まれないためか、イタリア語で書かれている。

「準備しておけ」

「あ、おい！」

リボーンが部屋から出ていった。ツナの母親の声がしたので、呼ば

れたのだろう。

投げられた紙を山本が拾い、3枚捲ってみるが、すぐにツナに渡した。

「なーツナ。コレ読めるか？」

「えっと・・・ゴメン。固有名詞しかわかんないや。獄寺君、読んでくれない？」

「はい。わかりました」

獄寺に渡したが、だんだんと目を動かす度に顔を顰めていく。

「獄寺君・・・？どうしたの？」

「あ、すいません。えっと、レアートファミリーというマフィアが文月ってトコのシステムを狙っているそうです」

「で、獄寺君はそのマフィアとなにかあったの？なんか動揺してるみたいだし」

ツナの超直感も中学生の時より精度は上がっている。少しの動揺ほどなら見抜ける。

「いえ、名前を聞いたことがあります。薬やら殺しやらを平気でやるそうで、ソイツらのせいで親を亡くしたガキも結構いるらしいです」

それを聞いてツナと山本もなんとも言えないような顔になる。獄寺が母親を亡くしているのを知っているため、他人事とは思えないのだろう。だが、それを聞いてふと、疑問がうかんだ。

「なあ、レアートファミリーだっけ？ソイツらはなんでそのシステムを狙ってんだ？」

「その召喚獣システムはテストの結果が良いほど強力になる。しかも設定を変えれば召喚獣を実体化させることもできるからな」

「そっか、頭が良い人にテストさえさせればいいから普通の武器より楽だってことだね？」

「そのとおりです。それを阻止する為に潜入してこいと書いてあります」

最後の紙には正式な任務として炎の印が押してあった。

「分かった。獄寺君、無茶しちゃダメだよ」

「はい。山本、10代目になにかあったらタダじゃすまねえからな」

「おう。分かってるって」

こうして文月学園への潜入任務が始まったのだった。

任務、来る！（後書き）

レポートは犯罪や違法行為という意味です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1699s/>

バカとボンゴレの嵐の協奏曲(コンチェルト)

2011年10月8日06時41分発行